
『フラスコの中の小人は夢を見る』

浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『フラスコの中の小人は夢を見る』

【Nコード】

N9145W

【作者名】

浅葱

【あらすじ】

フラスコの中の小人は夢をみる。フラスコの中の小人は夢をみた。フラスコに入った小さな女性を見つけた、孤独感に悩む男子高校生。それからふたりの奇妙な共同生活が始まった……。不思議系短編です。PIXIVでも投稿しております小説です。

（前書き）

二人の奇妙な共同生活のはてに待つものは・・・？

フラスコの中の小人は夢をみる。
フラスコの中の小人は夢をみた。

「わたしは何でも知っているの。けれど、わたし自身のことは、何も知らないの。だから、わたしは世界を知りたい」
フラスコの中の女性はそう言った。何でこんな『フラスコ』を持ち帰ってきてしまったのだろう。僕の記憶は今日の放課後に巻き戻る。

僕は、いつも思う。人は結局、一人でしか生きられないのかと。高校の友達は、何も考えてないようで、気楽に僕に話しかけてくる。でも、違うんだ。夜になって、一人で布団にもぐる。そして目を瞑る。すると、僕は宇宙で一人、中心にぽっかりと浮かんでいるのだ。そして、その孤独感に、どうしようもなく寂しくなる。

何も考えないで生きられたら楽なのだろう。

そうしたことを、今日も悶々と考えながら、いつものように授業が終わる。だが、放課後に忘れ物をしたことに気づき、高校の理科室へ、教科書を取りに行った。すると、そこに『居た』のだ。

綺麗に磨かれているフラスコたちの中にある、一つのフラスコに、長く綺麗な黒髪を背中まで流す、白い簡素な服を着た女性が入って

いた。

僕はその小さな小人の女性が入っているフラスコを見た。

この世界に未知の存在が居たことに、驚いた。

この女性は、孤独に見えた。僕と同じに。宇宙で一つ、ぽっかりと漂っている。それに、自分を重ねたのかもしれない。

僕は、まるで自然なことのように、そのフラスコを鞆に入れると、家まで持って帰ってきてしまった。

「わたしは何でも知っているの。けれど、わたし自身のことは、何も知らないの。だから、わたしはわたしを知りたい」

フラスコの中の彼女はそう言った。なるほど、僕と正反対だ。

「僕は、僕自身のことは知り尽くしているけど、世界が知りたいとも思えない。だって、世界に新しいものは無いのだから」

彼女は首を傾げる。

「わたしは籠を壊す籠の鳥になりたい。あなたの籠は壊れかけの宝石箱のように脆いの？」

僕は、そう答えたフラスコの中の女性をじっと見てしまった。僕が言った事が、わかつているのだろうか？ 何でも知っていると言ったから、僕の知らない何かを答えてくれると思ったのだが。

「ここから10キロ北に向かったところには、真面目な大学生とシングルマザーがひっそりと暮らしてるし、あなたのいとは、優しいし、あなたもなかなか優しいのだろうけども、あなたはあなた自身のことは何も知らないし」

いきなり何を言い出すんだろう。僕のいとは確かに優しいが、真面目な大学生とシングルマザーなんかが、今、僕との会話で、何

の関係があるっていうんだろうか。

「わたしはわたしのルーツを知らない。わたしはわたしのルーツを知りたい。あなたはあなたのルーツをご存知？」

だから、僕は僕自身のことは何もかもわかってるって言うてるだろ！　そう僕が思ったとき、彼女がまた言った。

「あなたのルーツはまだ籠の中の小鳥のよう」

僕はやっと理解した。そうだ、この人の存在自体が、僕の知らない何かなのだ。だから、きつと、何を話しても、意味不明な言葉しか帰ってこないのだ。何でこんなものを持ち帰ってきてしまったのだろう。僕は一息付くと、お湯を沸かしてお茶を入れるために席を立とうとした。

「どこに行くのですか。わたしにわたしの知らないわたしを教えてください」

「きみ、きみに知らないことは無いって言うただろう。なのに、きみの知らない何かを僕が知っているとでも？」

僕はお茶を沸かすのをやめ、フラスコが置いてある机の前に戻った。

「それは、あなたが知っている筈です」

僕は呆れて、今度こそ本当にお茶を沸かし始めた。彼女は何も言わずに、フラスコの中でガラスに手を付き、僕の様子をじっと見ていた。

僕は、その日は夜まで彼女を放置していた。僕だって、一人暮らしという性質上、洗濯やら掃除やら、ご飯の支度だってしなければいけないのだ。

夜、寝ようと布団を敷いて寝転がったとき、やっと、机の上の女性と目が合った。女性は、何も言わずに、僕の方をじっと見ている。さすがに僕は良心が痛んで、女性に背を向けて、簡潔に一言言った。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

この人が、おやすみなさい、という言葉を知っていることに僕は驚いた。この女性も、案外普通の生活つてものを知っているのだろうか。だとしたら、一体どこで知ったんだろう。やっぱり、この女性と同類のものななんと、一緒に暮らしていたんだろうか・・・そんなことを考えながら、僕は眠りについた。

その日、僕は夢を見た。

真っ白い建物の中で、僕は見たことの無いベッドに寝かされ、ロープでぐるぐる巻きに縛りつけられている。そこへ覗き込むのは、白い髪に白い髭を生やしたマッドなサイエンティストと、小さな女性の子人だった。

「さあて、どうしてくれよう。君のルーツを吐いてもらおうか」

「わたしが知らないわたしを教えてくださいまで、離しません」

二人はそう言つて、なんだかよくわからないネジ巻きやら、トンカチやらを持って、僕を脅す。

助けてくれ。

そう言いかけたところで、目が覚めた。

何て夢だ。

僕がガバツと身を起こすと、フラスコの中の女性と目が合った。

彼女はぱっちりと目を見開いて、昨日と同じような体勢で、ガラスに手を付き、こちらを見ていた。なんだか気まづくなって僕は目をそらす。

「あなたの見る夢は夢です。わたしの見る夢は希望です。あなたの見る世界は姿を変える。わたしの見るものは姿を変えない」

僕は、変な夢を見た直後で機嫌が悪く、むっとした口調で言い返した。

「何を言っているのか、わからないよ」

「何が良いたいかと言うと」

フラスコの中の女性は、こほんと小さく咳をした。

「あなたの世界は姿を変えた。朝というものに。私の見るものは変わらない。あなたが朝を迎えたことは、幸せなことであると言っているのです」

なんだか、まるで良い目覚めをした爽やかな朝を僕が迎えたかのような言葉だった。けれど、その言葉には感じるものがあつた。けれど、それがなんなのか、わからない。

「はいはい。じゃあ僕は行って来るからね」

僕は、こんな意味不明な女性に何かしらの感銘を受けたことをごまかそうとして、手早く朝の準備を済ませると、玄関に立った。

「行つてきます」

「わたしを置いていくのも、あなたの世界の摂理を保つためのひとつのパズルのピースなのでしょう。あなたの世界の摂理はわたしの夢のようです。待っている薔薇は棘で刺し殺されたりしません」

僕は、ようやく話を通じるようになってきたと思つていた矢先にまた意味のわからないことを言われ、思わず鞆を肩から擦り落としてしまった。

「つまり？」

僕は頬を引きつらせて聞いた。

「希望あふれる私の夢へ、行つてらっしゃいませ。私は薔薇のように棘で自分を傷つけません」

僕は、何も言わずに、外に出た。鍵をかけるかかけまいか何故か迷つて、結局かけることにした。こんなのが居るとしたら、大騒ぎどころじゃ済まない。

僕はいつものように一日を過ごし、家へと帰宅した。そこへ待っていたのは、フラスコの中に入った小さな女性。

しかし、僕は昨日と今朝の会話の中で、彼女との間に殆ど意思の疎通を見出せなかった。よって、感動的な再会とはいかず、当たり

前のようにフラスコを素通りし、僕は夕飯の支度を始める。トン、トン、トン、と僕のまな板で野菜を切る音が響く。そこで僕はふと気が付いた。この女性は、食物を食べないのだろうか。

僕は、一かけらのブロッコリーを持って、彼女の前に座った。だって、餓死でもされたら、夢見の悪いことになる。

「きみ、食べ物は食べれるの」

「食物はすべてわたしにとって造花のチューリップのようです。わたしは植物の光合成とも動物の食物連鎖とも無縁なのです」

僕は、またも顔を引き攣らせた。

「どういうこと」

「食物はわたしに意味を与えてくれません」

「食べられないってことか」

女性は、じつと視線をよこすことで、質問を肯定する。

無駄なことをした。

僕は、またフラスコに背を向けると食事の支度を続けた。鍋を煮込みながら、僕は考えた。餓死の心配をするなんて、まるで、ペットを飼っているようだ。ペットの犬やハムスターと比べて違うところと言ったら、おかしい言葉を喋ることくらいか。僕が夕飯の支度をしていると、後ろのほうで小人の女性の声がした。

「知リたがりのわたし、あなたは喋リたがり？」

僕は思わず振り返って答えた。

「僕が喋リたがりに見える？ どうも、僕は知リたがりの君を満足させてあげられることはできないようだ」

「そんなことはありません」

「根拠は？」

「あなたはあなたの世界を知っているからです」

これの一本張りだ。僕は、このわけのわからないフラスコの中の女性に、だんだん怒りを覚えてきた。

「本当に、何で僕は君みたいなものを拾ってきてしまったんだろう。僕まで頭がおかしくなりそうだ」

「それは、私の頭がおかしいということですか」

小人の女性が片眉をぴくりと上げて静かな怒りを示す。

「ああそうだ、そうでなければ、一体何だって言うんだ」

この日、僕はわけのわからない悶々とした怒りに取り付かれ、「おやすみ」の一言を言わなかった。

その日、僕は夢を見た。

宇宙で一人ぽっかりと自分が浮かんでいる。周りには、高校で習った銀河系が張り付いているように静止している。息苦しい。このまま窒息死しそうだ。世界が変わらない、ってこんなに苦しいものだったのか。

うなされているとき、一筋の光がさすように声が聞こえた。

「あなたの世界は姿を変えます」

僕は目を覚ました。目には、何故か涙が浮かんでいた。苦しかったからだろうか？ いや、そうではない。確かに、あの声のように、世界が姿を変えたからだ。

なんとなしに目に入ったテーブルの上のフラスコの中では、女性が丸くなって寝ていた。

この女性が言っていた言葉を思い出した。『あなたの世界は姿を変えた。朝というものに。私の見るものは変わらない。あなたが朝を迎えたことは、幸せなことであると言っているのです』

無意識に、この女性の言葉を夢に見たのか。

ふとフラスコの中の女性に目をやると、いつの間にか起きていたようで、小さな唇を開く。

「おはようございます」

僕は、理科室でこの女性を見つけたとき、この女性が僕と同じ『一人でぽっかりと宇宙で漂っている』ように見えた。しかし、この女性は僕のように苦悩することはないように見える。僕の中に疑問

が浮かんできた。

「君は、悩んだりしないの」

「わたしの世界は姿を変えません。何もかもを知り尽くした世界から。すべてを知っている世界、そこに悩みなどありません」

『姿を変えない』その言葉に、僕は、静止した宇宙に張り付けられたような、今日の夢を思い出した。

「それって、すごく退屈ではない？」

「わかりません。わたしはわたしのことを知らないから」

僕は思った。この女性はもしかしたら感覚が麻痺しているのではないだろうか。

もしかして、知らないところで、僕と同じ、世界が変わらない苦しみを味わっているのかもしれない。

そして、この女性の唯一の動く世界の希望の鍵を、僕が握っているのだ。

何だかこの女性に協力したくなる気持ち湧き上がる。

けれども、また数分悩んで、出た結論はどうしようもないものだった。

この謎の女性の生い立ちなど、僕が知るわけが無い。せいぜい、僕がわかるのは彼女が黒い長い髪をしていて、白い簡素な服を着ているということくらいだ。

僕はまたいつものように一日を終え、家に帰ってきた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

奇妙な関係だと思う。こうして挨拶するだけで、何かが通じ合っている気がするのだから。

そして、僕は机の脇にフラスコを置いたまま、食事をする。

「ごちそうさま」

時々、女性は今までと同じわけのわからない言葉を言ってくるが、それに対しての応酬も、僕は大分上手くなってきた。

「あなたのシーツは夢見の鏡」

「へえ、それなら、このシーツで寝たら僕もいい夢を見れるかもね」
布団を敷いているときの会話である。

不思議と、自分は家に居て笑みを浮かべることが多くなった。主に彼女と話しているときに。

一ヶ月経ち、彼女が家に居ることが当たり前になった。そして、夜をいくつか重ね気づいたことがある。僕の宇宙でぽっかりと一人で浮かぶ苦しい夢を見なくなったのだ。

途端に、彼女が言った。

「わたしは、『知恵の小人』の集落からはぐれてきました。知恵の小人は、何でも知っています。けれど、自分の知らない何かを知ったとき、その小人は消えると言われています」

僕は、彼女の言葉に疑問に思った。

「きみは、消えたかったの？」

小人は首を振って僕を見上げる。

「私の知らない何かがあるのなら、知りたいと思っただけ。そのためなら、消えても構わないという覚悟でした」

僕は息を呑む。彼女は自分の存在をかけても知らないことを知りたいと思っていたのか。

彼女は静かに言った。

「二人の相互作用。わたしは喜んだ。あなたは喜んだ」

僕の胸に、その言葉は響いた。彼女の言葉は、今の僕らの関係を的確に表していると思ったのだ。

「でも、それが、わたしとあなたの終わりの時間です」

僕の心にひやっとしたものが落ちてきた。

「・・・終わり？」

「わたしは喜んだ。わたしは喜んだ。意味がわかりますか？」

「・・・わからない」

「それは、わたしの知らないわたし。やっと知ることができました」
女性は、初めて笑みを浮かべた。思わず見惚れるほどの綺麗な笑みだった。

「あなたの世界は姿を変えた。わたしの世界も姿を変えた」

そして、女性は沢山の光が瞬く中に姿を消した。

僕は泣いた。沢山泣いた。彼女の正体が何かなんて、どうでもよかった。ただ、彼女がそこに居てくれればよかったのだ。

それから月日が経った。

僕は今日も淡々と生きている。相変わらず友人とは距離を感じる。だが、なんだか、この人も、実は宇宙でぽっかり浮かんでいるのかな、と思ったりしてちよつと可笑しくなって・・・少し、嬉しくもなったりする。

今日もあの女性は居ない。けれど、あの彼女の、おかえり、と言ってくれる存在。それは、僕に確かな変化をもたらした。

僕は、あの女性に恋をしていたのかもしれない。

いまだに、宇宙でぽっかりと浮かぶ自分の夢を見る。しかし、以前と違うことが一つだけあったのだ。

僕は気づいた。こうして、宇宙で一人で浮かんでいるもの同士の出会う奇跡は、世界に一つではないのだ。

ぽっかりと宇宙に浮かんだもの同士が引き起こした相互作用。
あなたは喜ぶ。わたしは喜ぶ。
その時、あなたは言うでしょう。
「おはよう、世界」・・・と。

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

ご意見感想、簡単なことで良いので残してくださいと幸いです。

フラスコの中の存在がホムンクルスと関係あったことは皆様気づかれたでしょうか・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9145w/>

『フラスコの中の小人は夢を見る』

2011年9月22日03時31分発行